



Title	知的障害児との共同作業によるアート・ワークショップ
Author(s)	島先, 京一
Citation	デザイン理論. 2014, 64, p. 98-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56282
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

知的障害児との共同作業によるアート・ワークショップ

島先京一／成安造形大学

ここ数年、知的障害児たちをパートナーとした、アート・ワークショップに取り組んできた。一般に知的障害児を対象とした様々な取り組みは、福祉の視点に基づいた、ある種の善意がその出発点にあると考えられることが多いが、私が展開してきたアート・ワークショップの原点にあるのは、いくつかの学術的、そして芸術的な野心であったことを、本発表で報告する。

様々な偶然の積み重ねから障害者と出会った私は、障害学 Disability Studies という知的な刺激と学際性に満ちた学問領域に、必然的に会うことになった。障害学は、以前には主として医療的な関心の対象であった障害の問題を、社会学を中心とした人文科学的な観点から新たに構築することを目指す。そして障害学において優勢な視点の一つに、障害の社会モデルがある。障害の基点を個人の身体的機能欠損 Impairment に求める医療モデルとは異なり、障害の社会モデルは障害の基点を、社会的因子、環境的因子、そして文化的因子といった、外的要因に求める。世界的な障害者運動の原点の一つであるイギリスの UPIAS Union of Physically Impaired Against Segregation は、その宣言の中で障害者が不当に受けている抑圧の原因が社会にあることを明言する。そして多くの優れた障害学研究者が、UPIAS の精神を進化させながら、陳腐な常識を覆す新しい障害者像を模索しているのである。私の第一の野心は、このような障害学の刺激的な観点を、芸術の分野と交錯させることにあった。

私の第二の野心は、知的障害児とのワーク

ショップを介しての交流を通じて、障害の社会モデルに基づく、新しい知的障害者像を探ることである。しかしこれは、相当な困難が伴う企てであった。

身体障害者と異なり、知的障害者の定義は、医療的にも法律的にもそれほど明快ではない。そして知的障害者のあり方も、驚くべき多様性を見せる。また知的障害者から社会への抗議の声が上がることも、それほど多くあることではない。そして何よりも、殆どの知的障害者にとって、身体的機能欠損と障害 Disability の関係が不明瞭である。従って多くの場合、知的障害者の認定は、個人の能力に対する判断に頼ることになる。しかし能力の程度によって個人を判断する、いわゆる能力主義 Ableism は、優生理論を正当化する差別的な観点を誘発する危険を孕んでいる。

これらの困難を解消するために、私は現時点で、知的障害者について次のように理解しようとする。知的障害者とは、生産効率第一主義の社会の中で、能力主義的な観点から不当にも疎外され、周辺化されてしまった人びとであり、社会が生産効率第一主義や能力主義のような価値観を克服し、真の人間中心主義的な価値観の確立を目指すことができているかどうかを教えてくれる、ある種の指標的な存在である、と。私は、知的障害者と平均者の関係を、福祉的支援という観点からではなく、当たり前と同じ社会の構成メンバーとして暮らしていくという、共生の観点から捉えなおすことが必要であるとする。そして真の共生を実現するためには、まずは生活のあらゆる場面から、能力主義的な観点を払

拭する必要があるが、もちろんこれも簡単なことではない。

私は、芸術の文脈において、能力主義を完全に追放し、知的障害者と平均者の真の共生の可能性の一端を掴むことができるのではないかと考えた。芸術を、優れた感性的能力をもった個人による制作行為の成果であると考え、一般的かつ常識的な観点からすれば、私の主張は成り立ち難い。しかし現代美術のいくつかの動向の中に、新たな可能性のヒントがあると私には思われたのである。

私が可能な示唆を見出した第一の動向は、マルセル・デュシャンに始まる、レディー・メード・オブジェという作品形式である。現代美術においてレディー・メード・オブジェは、本来は有用性という観点から存在の意味が見出される日用品を、芸術という有用性が暴力的なまでに無効化される空間に強制的に転移させることによって、新しい存在の意味性を発動させることを目的としている。言葉を換えるならば、モノの意味を脱文脈化することによって、脱構築的な新たな意味性を見出すことを目指しているのである。

私が重要な教えを引き出した第二の傾向は、クリスト・ヤバシェフとジャンヌ・クロードによる、壮大なラッピングによる風景の一時的改変プロジェクトである。クリストとクロードのプロジェクトは、その壮大な規模ゆえに多くの人びとを作品の成立の場に巻き込んでいく。いわば、社会そのものを芸術化していく企てであり、そこには特権的な個人としてのアーティストというあり方は、重要な意味をもたない。

私にヒントを与えてくれた第三の傾向は、1980年代以降に見られるようになった、ほぼ同形のオブジェを、或いは均質性の高い物体を大量に展示する、インスタレーション作品である。なぜ大量のオブジェが展示されるの

かは、それぞれの作品やアーティストによって異なるのであるが、何れの作品にあっても、その巨大なスケール感と圧倒的な集合性が観る者を惹きつけるのである。

レディー・メード・オブジェに窺える脱文脈性と脱構築性、クリストとクロードの風景の一時的改変プロジェクトに見られる身体性を超えるスケール感と個人の能力差の無意味化、そして同形物の大量展示のインスタレーションに見られる圧倒的な集合性、これらから私は、知的障害児と平均者の違いが無意味化し、両者が全く同じ出発点から楽しむことのできるアート・ワークショップの可能性を見出した。私たちが楽しんだアート・ワークショップの方法論は、実は単純なものである。私たちは特定の空間に、大量の同形の日用品を持ちこむ。そして参加者にその大量の日用品で、その空間を埋めつくすように指示するのである。ある時はトイレット・ペーパーであり、またある時はビニールテープ、また別の機会には紙コップを大量に準備する。これらの日用品で空間を埋めつくすという、常識的な感覚からは誰にとっても意味が不明な行為に取り組む、しかしその行為は、誰にとっても楽しい、しかも複数の人びとが同時に身体性を超えたスケールに取り組むことによって、個人の能力差は意味を失ってしまうのである。私が仕掛けたアート・ワークショップは、日用品の意味の脱構築、個人の能力差の無意味化、そして意味は全く不明であるが、日常的にはまず許されることのないいたずらに取り組むという共犯性によって、知的障害児と平均者がきわめて等質性の高い笑顔を見せてくれる。笑顔こそが共生的な社会の指標であることを信じ、さらなる可能性を追求していきたい。